

2009年5月31日 主日礼拝メッセージ

厚別福音キリスト教会にて

聖書箇所：ローマ人への手紙7章18節～8章4節

説教題：キリストにある解放の恵み

1 クリスチャンの不安と悩み

(1) 「神に喜んでいただける歩みをしなさい！」でも...

信仰書を読んでいますと、ときどきこんな言葉に出会うことがあります。「あなたは神に喜んでいただける歩みをしていますか？きょう、自分のことをふり返り、もしそうでなかったのなら悔い改めなさい。そして、神に喜んでいただける者になりなさい。」

まじめな方はすぐに努力しようとします。デイブーションはちゃんとしています。教会の礼拝もきちんと出席しています。ささげるべきものはささげ、教会の奉仕もしています。目に見えるところでは、りっぱなクリスチャンに見える。みんなもそう言ってくれる。

ところが、意外なことなのですが、本人の中には喜びがない。どこか義務感でやっている気がする。「こうしなければ、あしなれば」というようにいつも背中からプレッシャーを受けるようにして歩んでいる。百パーセントを目指して頑張るのですが、できない自分がある。できない自分を責め、苦しむことがあります。

(2) 教会生活に喜びがない

またこのフラストレーションは人を責めほうに向かうこともあります。私はこれだけのことをしているのに、どうしてあの人はいないのか。私たちはこれだけ努力しているの

に、どうしてあの人はいないのか。ほかの人の欠点が目についてきます。そのうちに人間関係が気まずいものとなっていきます。神と共に歩むことは喜びですと言われるのですが、自分のうちには喜びがない。むしろ他人への苦々しい思いでいっぱいになっている。

突き詰めていくと、自分の中に葛藤があります。クリスチャンになれば、かつてのいろいろな悪いことはきっぱりと止められるはずだ、悩みはなくなり、苦しみもなくなるはずだとどこかで思っていました。でも、そうなれない自分。どうしてなのだろう。何が悪いのだろう。多くの方が悩んでいます。

どうしてこんなことになるのか。いったいどうしたらよいのか。今朝はこのことをごいっしょに見ていきたいと思います。

2 パウロの告白

ローマ人への手紙はパウロが書いております。パウロと聞けばすぐにすばらしい伝道者、信託者というイメージがあります。そんなパウロが自分のことについてこう言っています。「私はしたくないと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っていません。」

それを聞いて思います。「あのパウロさんはエリート信託者なのだから。私たちには小さなことを大げさに言っているのだ。」

しかし本当でしょうか。私にはパウロが特別に優れた信者であったとは思われません。確かに生涯を主にゆだねた熱心な伝道者であったかもしれませんが、パウロの内面を見たら私たちと全く変わらなかった人だと思うのです。パウロはそんな自分のことを包み隠さず、正直に書いていただけだったと思うのです。

3 矛盾の中にあるキリスト者

(1) 救いを受けている

救われているのにどうしてしたくない悪を行ってしまうのか。パウロが悩んでいた問題でした。そして私たちも悩んでいる問題です。

私たちは救いについてこんなふうに教えられてきました。自分の罪を悔い改め、キリストを主と心で信じて告白する者は、キリストの十字架によって救われます。あなたの罪は贖われ、赦され、あなたは聖い者とされます。全くそのとおりです。救いのことについてパウロもこんな表現をしています。6章2,11節「罪に対して私たちは死んでいる。」7節、「罪から解放されました。」

(2) しかし、罪を犯してしまう

それを聞いて私たちはすぐに考えます。救われた者はもう罪を犯すことはないはずだ。もし罪を犯すのであれば、それは信仰が弱いからだ。祈りが足りないからだ。がんばって、神に喜ばれる歩みをするように努力しなければならない。ところが、現実はそのとおりではない。それが多くの方の悩みとなっています。

私たちは、何かを誤解しているのではないかと思うのです。誤解しているのです。変に自分を責めてしまって落ち込むことになる。そ

の誤解さえきちんと整理できたなら、皆さんの悩みの多くが解決されるのではないかと思うのです。ではいったい何を誤解しているのでしょうか。

(3) からだはまだ贖われていない

パウロはこう言っています。23、24節。「私の体の中には異なった律法があつて、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、体の中にある罪の律法のとりこにしているのを見出すのです。私は、みじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出して下れるのでしょうか。」

私たちは救いをいただいております。たとえば、裁判所の法廷で「あなたは無罪です」と宣言された状態です。

ここで最初の誤解が生まれます。無罪だと宣言された瞬間に、私たちは新しい自分に生まれ変わった気持ちになります。事実、キリストを知らない人生からキリストとともに歩む人生に変えられましたので、これは大きな変化、新しいことです。

では、完全にすべてのことが新しくなったのか。一つだけ変わっていないものがある。私たちのからだです。からだはそのままです。このからだは、どうなりますか。やがて土に帰ります。滅びるからだです。どうして滅びるのですか。罪がからだの中にそのまま残っているから。

そうしますと、キリスト者というのはどういう状態なのか。パウロが25節の後半で言っているとおりの状態なのです。「この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」キリスト者は二つの引き裂かれた状態の中に置かれている。私はいつも言います。「そもそもクリスチャンは

矛盾の中に置かれている存在なのだ。その矛盾の中で悩むのがクリスチャンなのだ。」召された遠藤嘉信先生は、「もしクリスチャンであるのに罪に悩むことがないなら、本当に救いを受けているのかどうかわからない」と言っておられます。私も同感です。

救われたのに、どうして罪を繰り返してしまうのか。どうして罪から離れることができないのか。なぜ私たちがそのことで失敗し、悩むのか。そもそも、最初から矛盾した状態に置かれているので当然だったと言うことになります。

4 解放の恵み

(1) 罪に定められない

そんな私たちは、では、いったいどうすればいいのでしょうか。パウロが模範となります。彼は、自分の罪を自覚しておりました。そのことで苦しんでいました。苦しんではいたけれど、必要以上に自分を責めたりはしません。その代わりにこう言うのです。7章25節「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。」8章1節「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」

現実には罪があります。そんな私たちだけでも、私たちは罪に定められることは決してない。何と感謝な事だろうか。だからあなたは気落ちする必要はない。そのような励ましです。

「どんな罪を犯しても赦されるのだから、何をしてもいいのだ」という開き直りとは違います。それはキリスト・イエスにある者の態度ではありません。どんなに気をつけているつもりでも、罪を犯し続けていく。悪いことを考え、誘惑に誘われ、むさぼってしまう。

そのことをまず、正直に主の御前に告白していく。怒られるのではないかとびくびくする必要がありません。神を信頼してよいのです。神への信頼があるので、素直に自分のうちにある汚いものを主の前にゆだねることができると。

(2) キリストが肉において処罰されたから

私たちの主であるキリストが人の姿をとって私たちの所に来られた、考えてみれば非常に不思議な事です。どうしてと考えます。

パウロはその理由についてこう説明しています。3節。「肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。」

キリストが人として私たちの所に来られ、十字架でその肉が裂かれ、血を流された。別の言い方をしますと、キリストが肉において処罰されなければならなかったほどに私たちのからだにまとりついている罪が深刻であると言うことです。私たちの努力でなんとかなるようなレベルでは全くありません。

(3) 弱さを分かち合う歩む

矛盾した状態の中に置かれている私たちです。そんな私たちは、ではどのように歩んでいくことになるのか。最後にそのことに触れておきます。

私たちの教会に集うある姉妹は、いつもこう言って涙を流されます。「こんな罪深い私は天国に行けないかもしれない。だから死ぬのが恐いのです。」この姉妹の告白を伺うたびに感動をいただきます。本人にはつらいこ

とかもしれません。でも、ご自分の罪をはっきりと自覚されていることに、クリスチャンとして誠実に歩んでおられるお姿を見る思いがします。この姉妹、今でも罪が無くなったわけではありません。罪に苦しむ状態は変わらずにあります。変わらないかもしれないけれど、主を信頼し、主の前にそのままご自分の弱さを打ち明けておられます。その姿に、教会の皆さんも、そして私自身も励ましを受けております。この方は確かに救われているとますます確信をいただくのです。

神の前で自分飾る必要はありません。ありのままの自分を主にゆだねるだけでよい。もしそのことができたなら、私たちはキリストにある解放の恵みを味わうことができると信じます。決して些細なことではありません。世の人たちが驚くほどのすばらしい恵みが、その所からあふれていくのです。